

今村 亜子（言語学）

## 言語発達過程における「誤り」と「修正」に関する考察

本論文は、言語発達過程にみられる言語運用上の「誤り」が解消する過程の解明を通じて、言語研究と言語障害研究との接点を探求することを目指したものである。3つの異なる事例から言語運用上の「誤り」の解消過程が考察されている。

1つ目は「音声置換現象」である。機能的構音障害の子どもたちを対象として、音声置換について検討した結果、音韻的な知識のレベルでの混同ではなく、実行システムの問題であることが指摘された。その上でなぜ実行システムの問題に気づかないかという点を考察し、自己産出音声に対する範疇的な知覚の基準にズレがある可能性が示された。修正が生じるにはこのズレが解消される必要があると考えられた。

2つ目は「可逆事態かきませ文の処理方略」である。単文処理方略には語順方略から助詞方略の移行があることが知られているが、助詞方略に至る過程には、中間的な方略があるのではないかという観点から事例検討が行われた。「被動作主(ヲ)+動作主(ガ)」の可逆事態かきませ文について助詞「ガ」のみを利用する「ガのみ方略」があることが主張された。

3つ目はリテラシー確立の前段階である「プレリテラシー」である。ここでは「読むふり」から「読み」のリテラシーへの移行と、擬似文字から文字への移行について事例検討が行われた。その結果、プレリテラシー段階は、自分流の読み書き行動の疑似性についての自覚がない段階とある段階に区別されることがわかった。リテラシーへの移行には後者の「疑似性の自覚」が重要であることが主張された。

事例検討から言語運用上の「誤り」は、他者からの働きかけがあっても修正できない場合と、他者からの働きかけを契機に修正可能な場合があることが示された。子どもたちが言語知識に気づかない限り「誤り」は解消しないが、他者とのやりとりによって移行過程を促進する可能性があると考えられた。言語発達過程における「誤り」の解消段階が次の3つに分けられた：段階Ⅰ：初期段階（誤り解消に必要な言語知識に気づかない段階）； 段階Ⅱ：中間段階（誤りの解消に必要な言語知識に気づくが実行段階で目標からズレがある段階）； 段階Ⅲ：完成段階（誤りの解消に必要な言語知識に気づき、目標からズレが生じた場合にも気づくことができる段階）。

以上の異なる領域の言語発達の事例考察から、言語研究と言語障害研究との接点としてこうした「誤り」の解消における移行過程を解明することの重要性が示された。こうした言語運用上の「誤り」が解消する段階を明らかにし、自発的な「修正」の発生について検討することは言語発達障害児へのサポートという観点からも重要な研究である。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。